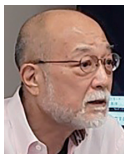


FORUM REVIEW AF119

テーマ：いまさら聞けないサーキュラーエコノミーの話

講師：妹尾 堅一郎氏 NPO 法人産学連携推進機構 理事長

日程：2023年7月21日



慶應義塾大学経済学部卒業後、富士写真フイルム勤務を経て、英国国立ランカスター大学経営大学院博士課程満期退学。産業能率大学、慶應義塾大学、東京大学、九州大学、一橋大学大学院MBA等にビジネスモデル等に関する教鞭・指導を歴任して現職。ベストセラー『技術力で勝る日本が、なぜ事業で負ける』は流行語にもなった。実践面では秋葉原の再開発プロデュース等で著名。

iPhoneが13から14にバージョンアップされた際、機能の変化はあまりないとの前評判でしたが、実際には、中の構造が大幅に変わり、圧倒的に修理しやすい構造になっていた。これはどういうことか。欧米では、今、「修理する権利」を推す動きが盛んで、環境保護のためでもあるが、資源枯渇を見据えた動きでもある。

世界の人口はすでに80億人を超え、遠からず100億人に達すると言われている。既に、地球が再生産できる量の倍近い資源を消費しているとも言われ、従来型の線形経済のままでは持続不可能なのが明らか。従来の線形経済はマス&ファストを前提としたモノ消費主導経済だが、サーキュラーエコノミーが目指すのはレス&スローの長命経済で、「買い換え経済」から「使い続け経済」へと、ビジネスモデル自体を変革させなければならない。モノを作って売る経済から、XaaSと呼ばれるサービスビジネスに移行する動きもその一つ。また、動脈経済と静脈経済の中間に当たる、メルカリのような「使い続け産業」も台頭してきている。

多くの国が、持続可能な社会成立の目標を2050年としているが、社会全体に実装されるまでの期間を考えれば、サーキュラーエコノミーに向けた技術、制度、文化、仕組みなどの変革は早急に行われるべきである。そして、その変革に向け、「さすが」と言われるような取組みをし続けられるかが企業に問われている。

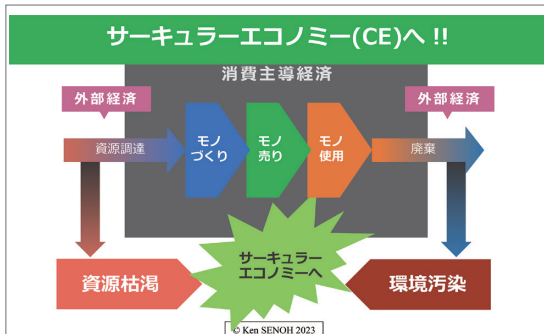
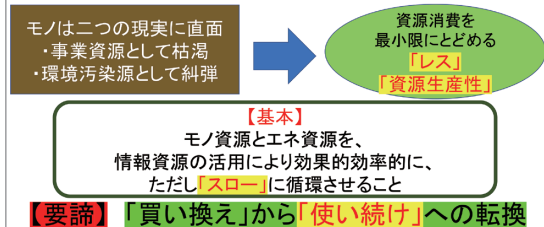


図1 消費主導経済からサーキュラーエコノミーへ

サーキュラーエコノミーの本質（構図）



【要諦】 「買い換え」から「使い続け」への転換

© Ken SENOH 2023

図2 サーキュラーエコノミーの本質